

〔研究ノート〕

## ファミリーリスクマネジメントの 体系化に関する一考察

金 瑤

### 目 次

1. はじめに
2. ファミリーリスクマネジメントの端緒およびその展開
3. 家庭の財務活動（家計）のリスクマネジメントとしてのファミリーリスクマネジメント
4. 家庭生活全般のリスクマネジメントとしてのファミリーリスクマネジメント
5. 家庭のフィナンシャル・プランニングとしてのファミリーリスクマネジメント
6. おわりに

### 1. はじめに

われわれの家庭は、死亡、病気、ケガ、自然災害（台風や地震など）、交通事故などさまざまなリスクにさらされている。さらに、近年の人口の高齢化・少子化、低成長経済下における所得の伸び悩み、失業率の増加などの社会・経済環境の変化は、経済社会の最小単位である「家庭」に大きな影響を及ぼしている。このことは、家庭を取り巻くリスクの多様化を促進している。したがって、家庭においては従来にも増してリスク管理の必要性が高まっているといえよう。

家庭のリスクを管理することを「ファミリーリスクマネジメント（以下、FRM と略称する）」というが、この用語または概念が最初に提唱されたのは、後述するように1960年代のアメリカにおいてである。その後今日までFRM はさ

まざまな論者・文献において取り上げられてきたが、その対象または範囲等は区々であり、その意味も論者・文献によって異なっているのが現状であると思われる。

めまぐるしく変化する近年の家庭をめぐる環境は、FRMの重要性を著しく高めている。かかる状況下にあっては、FRMの概念を体系化しておくことが必要不可欠であるといえよう。そこで、本稿では、FRMを取り上げた主要文献をレビューすることを通じて、FRMの体系化のための視点を明らかにすることを試みたい。

## 2. ファミリーリスクマネジメントの端緒およびその展開

奈良（1995）によれば、FRMに関する最初の研究は、Williams and Heinsの1964年の著書 *Risk Management & Insurance* の中の第3部 “Family Risk Management” であるといわれている。それは企業のリスクマネジメント<sup>1)</sup>の家庭への応用を試みたものであるといわれている<sup>2)</sup>。FRMの概念がアメリカの家庭管理の一環として採用された背景には次のようなものがある。すなわち、1960年代から1970年代にかけてアメリカでは、ベトナム戦争、若者たちの反既成秩序運動、女性解放運動や黒人解放運動などの中で、既成秩序と既成道德に対する不信および価値体系の激変はそれまでの理想像とされていたアメリカの家庭を激しく揺さぶり、離婚や非嫡出子の増加、非婚同棲などいわゆる「家庭の危機」を表面化させた<sup>3)</sup>。そこで、アメリカの家庭を救うためにさまざまな方策が試みられたが、その中の一つが、リスク概念を家庭管理に導入したFRMである<sup>4)</sup>。

---

1) リスクマネジメントは1930年代初めに企業の純粋リスクを管理する目的で生まれた。世界大恐慌後の不況に見舞われたアメリカの企業は、費用の削減や経営の合理化を図るために、従来の保険購入を見直し、合理的に保険を活用するようになった（保険管理を中心とした純粋リスク管理）。石名坂（1999）p.28参照。

2) 奈良（1995）p.15参照。

3) 石名坂（1999）p.29参照。

その後、FRMの研究は、Williams and Heins (1971)、Wood (1989)、Black and Skipper (1987; 1994) などによってその理論化が模索された。

さらに、企業のリスクマネジメント（ビジネスリスクマネジメント）を家庭に応用し、家計のリスク（純粋リスク）に合理的に対処するためのFRMのほかに、純粋リスクだけではなく、投資や資産管理などといった投機的リスクも含めた、パーソナル・フィナンシャル・プランニングの一環としてのFRMの研究も行われている。たとえば、Hallman and Rosenbloom (1983; 1987; 1992; 2000)、Rejda and McNamara (1998) などがある。

日本において家計のリスクマネジメント研究が始められたのは、西川 (1987)、戸出 (1987) および佐藤善信 (1987) であるといわれている<sup>5)</sup>。かかる研究が端緒となって、石名坂 (1989)、石名坂 (1999)、平野 (1991)、大城 (1992)、藤田 (1998)、飯田 (1998)、奈良 (1995)、尾島・東・荒深・山口 (1998)、内田 (2003) などの数多くの研究が蓄積されている。

FRMの研究は、その取り扱う問題領域およびアプローチの違いから、次の3つのカテゴリーに大別されるように思われる<sup>6)</sup>。

第一に、家庭の財務活動すなわち家計のリスクを管理するためのFRMである。この場合、リスクマネジメントの対象は、経済主体としての家計に経済的不利益をもたらすリスクであり、管理の対象となるのは純粋リスクである。したがって、家計のリスクマネジメントの目的は、家庭生活を脅かす経済的不利益の可能性に対して合理的に対応することである。

第二に、家庭生活にかかわるすべてのリスクを管理するためのFRMである。リスクマネジメントの対象には、生活主体としての家庭がかかえる経済的リスク

---

4) 同上。

5) 奈良 (1995) p.17参照。

6) 奈良 (1995) は本稿にいう第一と第二の2つに分類している。

（純粋リスク）だけではなく、人的資源や時間的資源などの生活資源にかかわる非経済的なリスクも含まれる。

第三に、家庭のフィナンシャル・プランニングとしてのFRMである。家計のリスクマネジメントは経済的リスクの中の純粋リスクを対象としているが、フィナンシャル・プランニングの主要部分を構成するリスクマネジメントは、経済的リスクの中の純粋リスクだけではなく、投資や資産管理などの投機的リスクも対象としている。

以下では、上述の三つのアプローチで理論展開が行われたFRMに関する主な先行研究をレビューすることにしよう。

### 3. 家庭の財務活動（家計）のリスクマネジメントとしての ファミリーリスクマネジメント

#### (1) Black and Skipper (1987)

Black and Skipper (1987) は、家計のリスクマネジメントとは、「潜在的な損害をもたらすエクスポージャーを確認し、評価し、それへの対応を展開することである」<sup>7)</sup>と述べ、堅実なリスクマネジメントは個人や家庭の財務計画の基本要素であり、エクスポージャーを管理することによって、最小の長期費用で家庭の財務目的を達成することができる<sup>8)</sup>と指摘した。

Black and Skipper によれば、家計のリスクマネジメントの実践は、次のような六つの段階をたどるリスクマネジメント・プロセスである<sup>9)</sup>。まず、第一に、家庭が遭遇することのある損害に関する危険状況（財産損害、賠償責任損害およ

---

7) Black and Skipper (1987) p.4.

8) *Ibid.*

9) *Ibid.*

び人的損害）を確認するために情報を収集する。第二に、生活設計上の財務目的に合致し、これを補完するリスクマネジメントの目的を設定する。第三に、第一の段階で集めた情報を分析し、潜在的な財務的損害の結果を推定・評価する。家計リスクの評価は、各家庭において想定されたライフサイクルとそのための資金準備計画などを提示した生活設計とのかかわりの中で行うべきである。第四に、危険状況についてさまざまなリスク処理手段の適用を検討し、最適な組み合わせを決定する。リスク処理手段は、リスク回避、リスク軽減、リスク移転（保険の購入など）およびリスクの保有の四つに大別される。第五に、リスク処理計画を実行する。第六に、リスクマネジメント計画全体をモニターし、環境の変化に応じてそれを修正する<sup>10)</sup>。

## （2）大城（1992）

大城（1992）は、家庭を取り巻く環境が大きく変化している中で、生活設計の重要性が高まり、また、生活設計の推進過程においてさまざまなリスクに対応するために家計のリスクマネジメントを展開する必要性がある<sup>11)</sup>と指摘した。大城は家庭におけるリスクマネジメントを「家計のリスクマネジメント」として捉え、その領域を経済的な問題に限定したうえで<sup>12)</sup>、「生活設計の本命は、『長期のストックの生活設計項目』にあり、『老後に焦点を合わせ、そこからフィードバックして、長期の生活設計を考え、その最適組み合わせを考えること』であるとされるように、家計のリスクマネジメントも長期的な生活設計の実現を保障するというフレームワークにおいて、日々の生活リスクに対処する視点が必要とされるのである」<sup>13)</sup>と述べた。

10) Black and Skipper, *op cit.*, pp.4-7.

11) 大城（1992）pp.161-163参照。

12) 大城、前掲論文、p.159参照。

13) 大城、前掲論文、p.163参照。

また、大城は前出の Black and Skipper (1987) に依拠し、家計リスクマネジメントの実践は六つの段階をたどるとし、とりわけ、情報の収集（第一の段階）、情報の分析（第三の段階）および計画の実行（第五の段階）を中心として展開されることになっている<sup>14)</sup>と指摘した。

さらに、大城は家計リスクについて、「家庭生活の現状を基礎とする短期的な検討と、家庭の将来設計に基づく長期的な検討の、二つの局面を考察する必要」<sup>15)</sup>があり、「これら両局面のいずれを欠いても、家計リスクへの対応としては充分ではない」<sup>16)</sup>と述べた。なぜかという、家庭の生活設計における老後問題の重要性が多くの人々に認識されているからであり、また、そうした生活設計を支えるリスクマネジメントの機能が日常生活の安定化にも基盤を置いているからである<sup>17)</sup>。

### （3）石名坂（1999）

石名坂（1999）は、「家庭管理にリスク概念を導入し、家庭の目的を達成するためにその目的達成を阻害し、家庭の資産の減少をもたらすリスクを合理的・科学的に管理しようとするものがファミリー・リスクマネジメントである」<sup>18)</sup>と述べた。家族の自己実現、すなわち家庭管理の目的あるいは目標については、①基本的な目標としての安全・健康・創造・平等、②家庭経営目標としての安全性・向上性・能率性・満足度、③個別目標としての個々の家庭の具体的事項などが挙げられ、このような目的あるいは目標の達成にいたる過程に発生するリスクを識別し、それらを測定し、最適な方法で処理を行うことがFRMである<sup>19)</sup>と指摘さ

14) 大城、前掲論文、pp.163-165参照。

15) 大城、前掲論文、p.168参照。

16) 同上。

17) 同上。

18) 石名坂（1999）p.31参照。

19) 石名坂、前掲書、p.26参照。

れている。

石名坂は、FRMの対象リスクを、物理的・自然的リスク（地震、洪水、津波、落雷などの自然災害）、社会的・経済的リスク（火災、交通事故、盗難など）、政治的・政策的リスク（消費税改定、年金制度改革など）、技術的・革新的リスク（家電製品のモデルチェンジ、通信システムの変更など）、人為的・人的リスク（死亡、疾病、ケガ、失業、退職など）、の四つに分類した<sup>20)</sup>。また、石名坂は、これらのリスクを、自然災害、火災、交通事故、疾病、ケガ、盗難、物価上昇など日々の家庭生活の中で起こりうる「日常リスク」と、人の生涯において多くの人が出会う事柄、あるいは待ち受けている出来事、ライフステージ上の「イベントリスク」に区分し、このような日常的リスクやイベントリスクに対応すべく、家庭のライフサイクルにあわせて、ライフステージごとにリスクマネジメントを行う必要性がある<sup>21)</sup>と指摘した。家庭のライフサイクルについては、ファミリー形成期（就職してから結婚し、子どもが義務教育年齢まで成長するまでの期間）、ファミリー成熟期（退職するまでの期間）およびファミリー完成期（定年退職後の老齢期）の三つから成る<sup>22)</sup>とされている。

さらに、石名坂は、FRMは家庭管理の特別な問題を取り扱うものではなく、家庭管理目的あるいは目標を達成するために実施される一連のプロセスである<sup>23)</sup>と指摘した。まず、第一段階としてファミリーリスクの発見と確認を行うが、そのための用具として、家計簿、チェックリスト、健康診断書、生活設計書、ライフサイクル表がある。その上で、発見・確認されたリスクを分析し、測定を行う。次に、第二段階として、FRM技法の最適案を検証するが、それには大きく、リスクの回避、損失の予防・軽減などのリスク・コントロールと、リスクの移転と

20) 石名坂、前掲書、pp.31-32参照。

21) 石名坂、前掲書、pp.32-38参照。

22) 石名坂、前掲書、pp.47-63参照。

23) 石名坂、前掲書、p.40参照。

保有といったリスク・ファイナンスの二つの方法がある。さらに、第三段階では、最適な FRM 技法を決定する。第四段階としては、家庭のライフサイクルにあわせて決定された FRM を実施することである。最後に、第五段階として、これら一連の FRM 計画について再評価を行い、見直しを行うことである<sup>24)</sup>。

#### 4. 家庭生活全般のリスクマネジメントとしてのファミリー リスクマネジメント

##### (1) 尾島・東・荒深・山口（1998）

尾島らは、FRM を「経済的資源のみならず、非経済的領域も含めたすべての生活資源とのかかわりのなかで検討するという視点を加味し」<sup>25)</sup>、ファミリーリスクは「個人・家族が有する諸資源の減少がもたらされたり、その増大が妨げられることにより、生活経営上に実害が発生する危険性である」<sup>26)</sup> と述べた。ここでいう生活資源には経済的資源と非経済的資源が含まれているが、前者は金銭および金銭との交換が可能な物財であり、後者には、対人的資源（夫婦関係・親子関係等の家族関係や地域の人間関係）、人的資源（能力や技術など）、時間的資源（労働時間や余暇時間など）および空間的資源（活動空間の広さや住宅環境）がある<sup>27)</sup> とされている。

尾島らは上述のような枠組みのもとで、愛知県内の子どものいる世帯を対象に調査を実施し、どのようなライフイベントがリスクとして認識され、またリスクに対処するための準備が進められているかについて明らかにしようと試みた<sup>28)</sup>。

24) 石名坂、前掲書、pp.41-45参照。

25) 尾島・東・荒深・山口（1998）p.2 参照。

26) 同上。

27) 同上。

28) 同上。



調査の結果、次のようなことが分かった。

第一に、リスクに対する認識と準備の間に次のようなギャップが見られることが明らかになった<sup>29)</sup>。

①「高額耐久消費財購入」「住宅購入」「子どもの教育」という確実性が高く、家族あるいは個人の価値判断に基づいて設計できるイベントについては、それらにより家庭に損害がもたらされることはあまり考えられておらず、リスクの大きいイベントとして捉えられていない。しかし、それにもかかわらず、そのための準備についてみると、「話し合い」「情報収集」「預貯金」など、総合的に考えられており、家族との日常的なコミュニケーションの中での準備がなされている<sup>30)</sup>。

②「事故・病気」「火災」「転職・失職」という不測のイベントについては、それらの発生によりほとんどの生活資源が減少し、家庭生活に損害が生じることが認められている。しかしその一方で、不測のイベントについては「保険の加入」としての準備は充実しているが、「家族での話し合い」や「情報収集」などはなされておらず、総合的な準備がなされていない。すなわち、時間・空間・人間関係などの非経済的資源の確保がなされていないということである<sup>31)</sup>。

第二に、「転職・失職」「老親の世話や介護」「定年退職と老後の生活」といったイベントリスクについては、認識も準備もなされていないことが明らかとなった<sup>32)</sup>。

この調査結果を踏まえて、尾島らは、家庭を取り巻く社会経済環境が変化するにつれ、生活経営において従来以上に多種多様なリスクが発生するようになっているので、「自らの目標に向かって将来もゆとりある生活を送るためには、短期的なイベントだけではなく、高齢社会等も考慮した中期的・長期的な“生涯設

29) 尾島・東・荒深・山口、前掲論文、p. 7 参照。

30) 同上。

31) 同上。

32) 同上。

計”を考えることが必要である」<sup>33)</sup>と述べた。また、それらのイベントリスクの現実化により、どのような損害が発生するか予測し、そのためにはどのような資源をどのように準備すべきかについて、総合的に計画していくことが重要である<sup>34)</sup>と指摘されている。

## （2）藤田（1998）

藤田（1998）は、ライフコースやライフスタイルの多様化とそれに伴う生活リスクの多様化により、将来の不確実性が高まっているなかで、この不確実性をコントロールするための生活設計が必要となり、また、生活リスクに合理的に対処するためのリスクマネジメントが生活設計の要素としてその重要性が高まる<sup>35)</sup>と指摘した。

藤田によれば、生活設計はライフデザイン、資源マネジメントおよびリスクマネジメントの三つの領域によって成り立っている<sup>36)</sup>。生活設計とは、「これらの領域を総合的にマネジメントしていくこと」<sup>37)</sup>であり、具体的には、「過去からの個人あるいは家計の資源を確認し、将来のライフデザイン・ライフプランを描き、それに応じて、資源のバランスを保ちつつ将来へ向けて資源の再編成を行っていくことである」<sup>38)</sup>と述べられている。また、生活設計には、さまざまな資源を対象としている「広義の生活設計」と、経済的安定をはかることを目的とした「狭義の生活設計」があり、前者は、後者を経済的に支えるためのものである<sup>39)</sup>と指摘されている。

---

33) 同上。

34) 同上。

35) 藤田（1998）p.34参照。

36) 藤田、前掲論文、p.41参照。

37) 同上。

38) 同上。

39) 同上。

藤田は、生活設計の重要な構成要素である家計のリスクマネジメントが対象とするリスクは、家計の「現在の資源のポートフォリオ」や「将来の資源編成」に損失を与える事柄、すなわち「ライフデザイン・ライフプラン」を阻害する事柄が発生する可能性のことである<sup>40)</sup>と指摘した。さらに、損失をもたらす事柄については、①災害や事故などの偶然性に基づく事柄や定年などの制度的に決定されていて、個人ではコントロールできない事柄といった「非選択的事柄」と、②投資や能力投資などの資源管理そのものに付随する事柄やライフデザイン・ライフコースに関する事柄を選択する際に付随する事柄といった「選択的事柄」、の二つに大別し、これらのリスクを確認・評価し、最適な手段を用いて処理することが家計のリスクマネジメントである<sup>41)</sup>と指摘されている。

さらに、藤田は、従来の家計のリスクマネジメントを対象とした生活保障論、家計リスクマネジメント、FRMのいずれも保険の選択による処理に焦点が当てられているとし、事後のリスクファイナンスのみでは必ずしも十分ではない<sup>42)</sup>と指摘した。たとえば、「雇用環境の変化に起因する『収入リスク』や『資産リスク』への対応は、事前のリスク・コントロール手段である、『稼得能力の向上』や『情報収集』『人的ネットワークの形成』や共働き・ダブルジョブなどの『収入源の複線化』などが有効である」<sup>43)</sup>と述べられている。したがって、「今後リスクが多様化していく環境下では、リスクへの対応は保険や預貯金などによる備えのみではなく、『リスクの確認・評価・処理』といった一連のプロセスによって成り立つリスクマネジメントとして考える必要が」<sup>44)</sup>あり、家計の資源を活用し、さまざまな事前と事後の手段の最適な組み合わせを選択することが重要である<sup>45)</sup>

---

40) 同上。

41) 藤田、前掲論文、p.42参照。

42) 藤田、前掲論文、p.48参照。

43) 同上。

44) 藤田、前掲論文、p.34参照。

45) 同上。

と指摘されている。

## 5. 家庭のフィナンシャル・プランニングとしてのファミリーリスクマネジメント

### (1) Rejda and McNamara (1998)

Rejda and McNamara (1998) は、パーソナル・フィナンシャル・プランニングとは、「個人や家庭が財務的目標の設定およびそれを達成するための戦略の策定に関する総合的な計画を立て、実行するプロセスである」<sup>46)</sup>と述べた。また、家庭の財務活動に伴う不確実性（リスク）への対応が財務計画の策定・実施などを含めたリスクマネジメントであり、その対象となるリスクには、純粹リスクだけではなく、投機的リスクも含まれている<sup>47)</sup>と指摘されている。

また、Rejda and McNamara は、フィナンシャル・プランニングは個人や家庭にとって次のような利点がある<sup>48)</sup>と指摘した。①老後の生活資金や子どもの教育資金などといった財務的目的の達成、②生活水準の向上、③リスクへの保障、④債務の軽減あるいは回避、⑤遺産にかかわる費用の軽減、などである<sup>49)</sup>。

Rejda and McNamara によれば、パーソナル・フィナンシャル・プランニングのプロセスには五つの段階がある<sup>50)</sup>。まず、第一段階として、家庭の財務状況に関する情報を収集することである。具体的には、家計簿、バランスシート、保険の加入状況、株式や債権などの投資状況などに関する情報を集める。次に、第二段階として、資産や負債などといった家庭の現在の財務状況を確認し、分析す

---

46) Rejda and McNamara (1998) p.3.

47) Rejda and McNamara, *op. cit.*, pp.267-268.

48) Rejda and McNamara, *op. cit.*, p.4.

49) Rejda and McNamara, *op. cit.*, pp.4-5.

50) Rejda and McNamara, *op. cit.*, p.6.

ることである。第三段階では、財務的目標を決定する。第四段階では、第三段階で決めた目標を実現すべく財務計画を策定し、実行する。最後に、第五段階として、定期的に計画の見直しを行い、修正することである<sup>51)</sup>。

さらに、Rejda and McNamara は、家庭の財務リスクに対処する手段について言及したが、それには、資金管理と貯蓄、信用管理、借金と債務管理、税金計画、住宅取得とモーゲージ、保険（生命保険、医療保険、財産と賠償責任の保険など）、株式や債券、投資信託などへの投資およびその管理、退職後の生活資金計画（年金など）、遺産計画がある<sup>52)</sup>と指摘した。

## （2）内田（2003）

内田（2003）は、「経済主体としての家計の財務活動等を管理する家計財務管理は、家計のフィナンシャル・マネジメントにおいて中心的な役割を占めているもの」<sup>53)</sup>とし、「フロー（流れ・循環）ならびにストック（在り高・残高）の観点から主として収入・支出管理と資金調達・資金運用に基づく資産・負債管理から構成されている」<sup>54)</sup>と述べた。

内田は、家計財務管理に関係する問題として、①少子・高齢化社会と老後の生活設計、②家計におけるリスク・マネジメント、③生活保障と生活・家族イベント、④雇用環境の変化と労働供給、⑤金融自由化と家計資産負債選択、⑥パーソナル・ファイナンスとその管理技術、⑦生涯学習教育時代での諸種の個人・家計向けファイナンス教育の重要性、などを挙げた<sup>55)</sup>。

また、内田は、家計のリスク・マネジメントについて、家庭の日常生活やライ

---

51) Rejda and McNamara, *op. cit.*, pp.6-9.

52) Rejda and McNamara, *op. cit.*, pp.10-21.

53) 内田（2003）p.38参照。

54) 同上。

55) 内田、前掲書、p.42参照。

イベントなどの生活全般に関連するリスク（純粹リスク）対策とは別に、金融資産や実物資産への投資などに関連する投機的リスク（たとえば、金融機関や一般企業の信用リスクなど）への対応が求められる<sup>56)</sup>と指摘した。とりわけ、金融の自由化や情報化の進展により金融商品の多様化が進んだ今日において、家計が従来以上に長期的な視点から財務活動を管理する必要性が高まっている<sup>57)</sup>と指摘されている。

## 6. おわりに

本稿は、筆者の FRM に関する研究の一環として、主な先行研究をレビューすることを通じて、FRM の体系化を試みたものである。

従来の FRM 研究は、そのアプローチの違いから、①家庭の経済的リスクとりわけ純粹リスクを対象とする家計のリスクマネジメント、②家庭生活全般のリスク（経済的リスク（とりわけ純粹リスク）と非経済的リスク）を対象とする家庭生活のリスクマネジメント、③純粹リスクだけではなく投機的リスクも含めた家庭の経済的リスクを対象とするリスクマネジメントの三つに大別されると思われる。

しかし、①の研究は、企業のリスクマネジメント理論の家庭への応用を試みるものが多く、その対象は経済的リスクとりわけ純粹リスク中心であり、これらのリスクへの対応については、主として保険の購入を検討している。②の研究では、経済的リスクだけではなく非経済的リスクも FRM の対象にすべきであると提唱されているが、まだ体系的なアプローチが確立されておらず、研究対象の中心が経済的リスクの中の純粹リスクにとどまっていると思われる。③の研究については、フィナンシャル・プランニングの視点から家庭のリスクマネジメントを検討

---

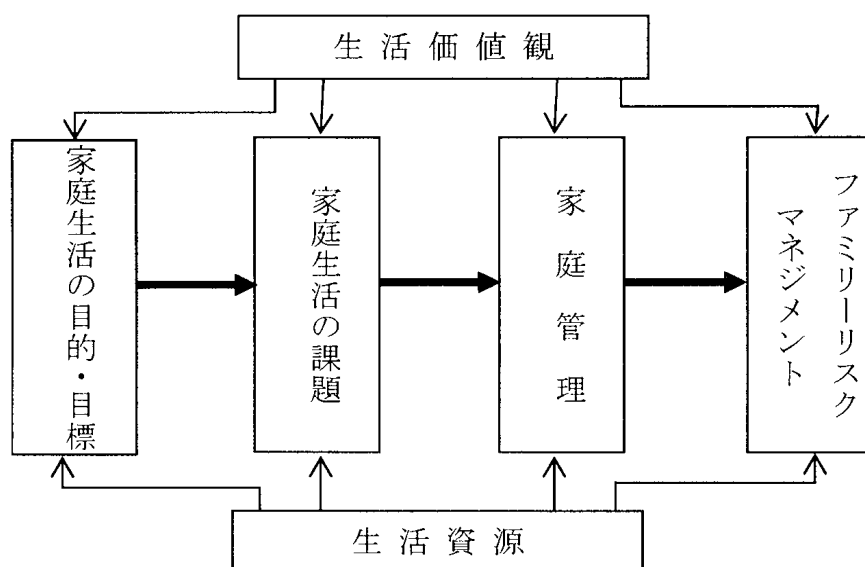
56) 内田、前掲書、p.60参照。

57) 内田、前掲書、pp.156-157参照。

しているので、当然のことながら非経済的リスクは含まれていない。

前述したように、家庭の生活資源には、経済生活資源、生活時間資源、生活空間資源、人間関係資源および能力資源の五つがある<sup>58)</sup>が、これらの資源を取り巻くリスクを管理することがFRMである。したがって、FRMは、家族が生活資源を活用し生活目標を達成するために行う生活設計（将来に向かってどのように生きてゆくかについての計画とその実行）において不可欠なものであるし、生活設計の重要な構成部分でもある。水島（2000）によれば、生活設計の枠組みは「何のために生きるのかという生活目的、そしてその目的達成のために日々の生活において目指すべき生活目標、さらには、そのような生活目標の達成のために設定される現実的な生活課題」から成り立つ<sup>59)</sup>。家庭の生活設計の一部であるFRMを検討する際も、このような枠組み（図1参照）の中で、生活全般のリスク（経済的リスクと非経済的リスク）を対象とした総合的なアプローチの構築が必要不可欠である。この点については、今後の課題にしたい。

図1 ファミリーリスクマネジメントのフレームワーク



出典：水島（2000）、p.37図表Ⅱ-1を筆者が一部加筆修正して作成した。

58) 第4章第1節 p.88参照。

59) 水島（2000）p.37参照。

【参考文献】

- Black, Kenneth Jr. and Skipper, Harold D. Jr. (1987) *Life Insurance*, 11th ed., Prentice Hall
- Black, Kenneth Jr. and Skipper, Harold D. Jr. (1994) *Life Insurance*, 12th ed., Prentice Hall
- 平野得二 (1991) 「家庭の危険管理（ファミリー・リスクマネジメント）—家庭の災害事象を中心に—」 損害保険企画『損保企画』
- 藤田由紀子 (1998) 「生活設計における新たな課題—リスクマネジメント」 生命保険文化センター『JILI FORUM No. 8 生活設計理論の再構築に向けて』
- 飯田倫子 (1998) 「生命保険需要の変遷からみる家計のリスクマネジメント」 生命保険文化センター『JILI FORUM No. 8 生活設計理論の再構築に向けて』
- 石名坂邦昭 (1989) 『ファミリーリスク・マネジメント』 白桃書房
- 石名坂邦昭 (1999) 『ファミリーリスク・マネジメントと保険』 白桃書房
- 奈良由美子 (1995) 「経営の2側面とリスクマネジメント—ファミリー・リスクマネジメントの可能性と課題—」 日本家政学会『日本家政学会誌』第46巻第11号
- 西川幹人 (1987) 「ファミリー・リスクマネジメントのあり方—問題提起—」 日本リスクマネジメント学会『危険と管理』第15号
- 水島一也 (2000) 『生活設計』 千倉書房
- 尾島恭子・東珠実・荒深美和子・山口久子 (1998) 「生活経営における生涯設計とファミリーリスク・マネジメント」 日本家政学会『日本家政学会誌』第49巻第10号
- 大城裕二 (1992) 「家計のリスクマネジメント」 亀井利明編『保険とリスクマネジメントの理論』 法律文化社
- Rejda, George E. and McNamara, Michael J. (1998) *Personal Financial Planning*, Addison-Wesley
- 佐藤善信 (1987) 「ファミリー・リスクマネジメントのあり方—消費者の知覚リスクをめぐる諸問題—」 日本リスクマネジメント学会『危険と管理』第15号
- 戸出正夫 (1987) 「ファミリー・リスクマネジメントのあり方—家計危険の発見とその分類—」 日本リスクマネジメント学会『危険と管理』第15号
- 内田滋 (2003) 『現代生活経済とパーソナル・ファイナンス』 ミネルヴァ書房
- Williams, C. Arthur, Jr. and Heins, Richard M. (1971) *Risk Management & Insurance*, 2nd ed., McGraw-Hill
- Wood, Glenn L., Lilly III, Claude C., Malecki, Donald S., Graves, Edward E. and Rosenbloom, Jerry S. (1989) *Personal Risk Management and Insurance*, 4th ed., American Institute for Property and Liability Underwriters